

推論の授業

実験を取り入れた理科の授業

9月6日(火)3校時に、3年1組で二階堂剛先生による理科の研究授業が行われました。さすがに3年生の授業だけあって、難しい内容のように思われました。まずは、前の時間の復習から入りました。

すると、生徒の反応がよくありません。そこで、先生は素早く側面のホワイトボードに移動し、説明を始めました。生徒は、それを集中して聞いています。生徒がわからないままにせずに、立ち戻って学習していました。これが、なかなかできないことがあります。研究授業であればなおさらです。

学習課題では、共書きを行っていました。先生の「鉛筆をもちましたか」から始まりました。先生は、課題を読みながらゆっくり板書していきます。生徒は慣れていきます。前時の復習に時間をかけても導入は予定通りの時間でした。スムーズです。

課題解決の段階では、実験が行われました。3年1組の生徒は、教室から並んで理科室まで移動してきました。そして、理科室に入ると、整然と席についていきます。先生からは「実験をやるときは立ってイスをしまします」という指示が出されます。このような雰囲気があると、安心して実験を進めることができます。それでも、先生からは実験上の注意事項がきちんと伝えられます。

この授業のポイントは、イオンになりやすい、なりにくいを電子の移動の様子から考えることです。リーディングスキルの視点でいうと推論にあたります。推論は、基本的知識と常識から、論理的に判断する力です。AIの苦手分野です。今回の授業では、時間が足りなくなり、生徒がじっくりと考え、自分の言葉でまとめるところまではいきませんでした。ぜひ、生徒の推論の力を見たかったところです。

9月14日(水)4校時、3年3組でのパターンCによる2回目の授業では、この部分が改善されていました。「電子の移動の様子から考える」ではなく「イオンになりやすい順を見いだす」となっていました。

学習課題の共書きでは、書き終えたあとに、全員で学習課題を声に出して読みました。メインの学習であるイオンになりやすい順について、先生は一人の生徒を前に出して説明をさせました。この説明は決して簡単ではありません。その生徒はマグネットパーツを動かしながら一生懸命説明をします。近くの生徒がそれを助けます。説明し終えたところで、拍手が起きました。心からの温かな拍手でした。その生徒と助け船を出した生徒は、授業後も話し合っていました。そこには、間違いなく学びがありました。いい光景でした。

文と図表やグラフなどを正しく対応づける社会の授業

9月8日(木)6校時に、1年1組で斎藤浩一先生による社会の研究授業が行われました。パターンCによる2回目の研究授業でした。1回目の研究授業の結果を受け、改善して臨んだ授業となります。

生徒は、気候帯を覚えるために「気候帯の歌」を歌います。先生と一緒に教科書を斉読します。ペアになり、相手に話す場が何度もあります。よく声が出ている授業です。また、先生は、何度も「友達をほめましょう」と働きかけていました。

この授業のポイントは、シベリアの雨温図や景観写真から、人々の生活の特色を読み取ることです。その際、衣食住の3つの観点を示しました。生徒は、様々な角度から気づいたことを発表していきます。大事なことは、とらえた特色や気づいたことを自分の言葉で表現できるかどうかです。

声を出す機会が多い授業のため、生徒の表現力向上が期待できます。単語から文、文から文章、そして説明へと発表のレベルが上がっていくことが期待されます。理解しているかどうかの最高レベルは、人に説明できることです。

40点アップの研究授業

9月7日(水)1校時に、3年3組で羽染俊輝先生による数学の研究授業が行われました。こちらも、パターンCによる2回目の研究授業でした。1回目の研究授業の結果を受け、改善して臨んだ授業となります。

授業終了後、羽染先生に「この前の授業に点数をつけると何点？」と聞いてみたところ「〇〇点です」と返ってきました。続けて「今日の授業は何点？」と聞いたところ「〇〇点でしょうか」という答えでした。40点もアップしました。これがパターンCの研究授業のいいところです。

私の感覚ですが、研究授業が終わった先生の自己採点が60点であれば、実際には、その授業は80点の授業です。大抵の場合、授業者は20点低く自己採点をしているものです。羽染先生の授業は、改善点が明らかで、1回目の反省がよく生かされていました。